

今週の 一冊

インターネット資本主義革命 池田信夫著

NTT出版・本体価格九五〇円

インターネット革命の本質と未来像を提示する

評者 西部忠 北海道大学経済学部助教授

「われわれは情報通信革命の真っ直中にいる、インターネットが世界を変える」。最近よく耳にする言葉である。確かに、一九九〇年代に入り、パソコンは急速に普及し、インターネット人口は激増し、マイクロソフトなど超巨大企業が出現した。これらは疑いようのない事実だが、次のような疑問も直ちにわいてくる。第三次産業革命といわれる情報通信革命は、それ以前の産業革命とどこが同じでどこが異なるのか？ 情報通信技術の中でもインターネットが特に注目されるのはなぜか？

こうした基本的な問題に正面から取り組み、説得的な答えを出している議論は多くない。本書は、情報通信技術や企業動向の具体例をあげて紹介している。その中で、それだけでも有用だ。しかし、本書が優れているのは、そうした単なる現象的記述にとどまらず、インターネットのもたらす変化を長期的かつ巨視的

にとらえて、その本質論と未来像を展開しているところにある。第一の問いに対する著者のスタンスは明快だ。資本主義が差異化とサヤ取りのゲームであるとすれば、インターネット資本主義とは、デジタル情報技術により加速されて、資本主義が極端なカタチで現れたものではない。本書のタイトルはさらにその行方を暗示しており、意味深長である。インターネットは、資本主義を押し進めるが、もしかしらそれがも超えてしまってもいいから、という予想が込められているからである。

第二の問いに対する答えは、電話交換機のような「インテリジェント・ネットワーク」とインターネットのような「ステューピッド・ネットワーク」の特性を比較分析することに見出される。光ファイバーの技術革新による伝送速度の爆発とともに現在進行しているのは、中央集権型の前者から自律分散型の後

者への転換なのである。貨幣のような普遍性

インターネット・ネットワークは、システムの負荷が中央に集中し、ネットワーク全体が複雑に連結しているため、部分的な技術革新は困難である。他方、インターネットでは、プロトコル（規約）であるTCP/IPが、データをパケット（小包）という小単位に分解して、サイトをバケット・リレー方式で転送する。TCP/IPは、オープンな「プラットフォーム

層」であるため、どんなネットワークも相互接続できるし、どんなアプリケーションも利用できる。これが通信コストを飛躍的に低下させた。また、通信構造を階層ごとに独立化するため、技術革新が容易になった。

結局、情報通信産業では、DOSやIPのように、あらゆる情報を標準化して貨幣のような普遍的な流通可能性を確立したことで、モジュール化や階層分化が進み、それが急速な技術革新を可能にしている。物理層プラットフォーム層アプリケーション層への階層分化は、情報の価値がその媒体とは独立であるという、情報の本質に基づいており、出版や金融も含む情報産業全般に共通するものだ。

貨幣を媒体とする市場とインターネットは類似しているが、

この本の目次

- プロローグ 資本主義という妖怪
- 開国か爆発か/見える手から見えざる手へ/「新自由主義」政策の成功/持てる者と持たざる者/インターネット資本主義
- I ステューピッド・ネットワーク
- 情報のパケット・リレー/偶然のスーパーハイウェイ/ネットワークの階層分化/改良的技術と突破的技術/パラダイムの交替
- II 情報のカプセル化
- 資源を浪費する技術/OAから情報革命へ/マス・カスタマイゼーション/要素技術のモジュール化/オブジェクト指向プログラミング/貨幣としてのIP
- III 帯域の爆発
- 新しいフロンティア/交換機からインターネットへ/第三代キャリア/通信自由化後の世界/すべての道はIPへ/最後のマイル
- IV 階層分化する企業
- 個人主義の技術/多様化する時間/情報産業としての金融機関/アンバンドリング情報産業の三層構造
- V 日本型ガバナンスの限界
- VI 新しい組織テクノロジー
- エピローグ 大聖堂とバザール

インターネットは本来、私的所有とは異なる思想から生まれた。著者は突き詰めていないが、この両者の異同は今後の経済社会を考えるうえで重要な意味を持つにちがいない。

マイクロソフト社の最大の敵は、今やオープンソース・ソフトウェア（OSS）であるという。OSSとはインターネット上で開発され、ソース・コードが公開され、無償で配布することが許されているソフトの総称だ。リナックスやアパッチなどがその代表例であり、世界中の優秀なプログラマーが共同で改良を重ねているから、商用ソフトよりもはるかに信頼性が高い。情報の公開と共有というOSSの原則は、金銭的動機を越える「自由な個人の連合」を生み出しうるのだろうか？ 時に「からっぽの洞窟」とも揶揄されるインターネット。それがもたらす革命を展望することはなんとスリリングである。



著者のプロフィール
いけだ のぶお
1978年東京大学経済学
学部卒業。93年までに
NHKで報道局などに
勤務し、報道番組を制作。慶應義塾大学大学院
政策・メディア研究科入学。同修士課程修了。
国際大学グローバル・コミュニケーション・セン
ター助教授。著書として『情報通信革命と日
本企業』（NTT出版）など。